

## ① 小諸市のMaaS(Mobility as a Service)の社会実験

小諸市では、MaaS(Mobility as a Service)を活用した社会実験が進行中で、地域の交通利便性向上や観光促進を目指しており、地域の交通と観光を一体化させる新しいモデルとして注目されている。その中でも、「縁 JOY！小諸」は、小諸市が地域の交通課題解決と観光振興を目的として実施している MaaS(Mobility as a Service)社会実験の名称であり、地域住民や観光客がより便利に移動できるよう、多様な交通手段を統合し、スマートフォンなどを通じて一括で検索・予約・決済が可能なサービスの提供を目指している。

### 《 所感 》

(山本 みゆき)

小諸市では多極ネットワーク型コンパクトシティのまちづくりによる“居心地の良い、ひらかれた”新しいまちづくりが進められている。中心拠点である小諸駅周辺の公共空間を活用した官民連携による新しいまちづくりに向けソーシャルグッド活動の種を“まちたね”として、その支援を社会実験として取り組む「こもろ・まちたねプロジェクト」が令和 3 年からスタートしています。この「こもろ・まちたねプロジェクト」では現在、社会課題となっている人口減少と新たな関係人口・交流人口づくりの展開、子育て・家庭教育支援、ゼロカーボンシティ(脱炭素型まちづくり)への転換などに対し、多極ネットワーク型コンパクトシティのまちづくりによる対応策を試みており、その効果が小諸市内全域に展開することを目指しています。具体的な活動として、駅前にある公共施設・公共的空間を活用し、駅前に集まる様々な人々とのつながりを深めながら、官民連携による様々な社会実験を行い、効果を確認しています。「交通社会実験」ではスマートカート egg、EV バスによる新交通の運行、LINE 公式アカウント「信州こもろ・こま〜す」での情報発信によって、駅前に集まる人々の”新たな発見”と”体験”を促進し、小諸に好感を抱いてもらい関係人口・交流人口の増加を図ることを目的としています。民間の力(資金・ひと・ノウハウ)との競争のまちづくりは大町市も大いに参考にすべきと感じました。また、EV3輪カート「スマートカート egg」に実際に乗車し、小諸市駅周辺のまちをめぐることで「小諸市に好感を持つ」ことを実感として感じ取ることが出来ました。

(大竹 真千子)

今回小諸市の取り組みを視察させていただいたことで、MaaS=次世代公共交通への意向のスキームの一部を理解することができた。他市のスキームについても引き続き学ぶ必要があるが、DX(デジタルトランスフォーメーション)による、公共交通を利用するための素養として、情報を管理する仕組みとは一体で施策を進める必要があることを確認できた。また、どういった事業者が関わることで仕組化することができるかを確認することができた。まちづくり会社の関わりもひとつもポイントであった。社会実験の段階で、どのような人が、どのようなところで、どういった目的で利用するかのできるデータを取得することができ、そこから新たな、コース・エリアにどの乗り物を配置していくかを読み取ることができる点についても今後の動きを注視したい取り組みであった。

(中村 直人)

観光向けの取り組みが多かった。電子化することで、利用者の利便性が向上するのはもちろんだが、行政、サービスの提供側としては、詳細なデータが蓄積されていくことが素晴らしいと思った。それらを活用しながら次の施策の方向性を検討していることが重要。

デマンドタクシー、1人乗車あたり1300円ということで、かなり効率的な運営。乗り合わせは必ず00時、30分の時間でという約束事を決めているらしく、それが乗り合い率の向上に繋がっているとのこと。

(西澤 和保)

公共交通に関して実証実験を通じて、効率性と利便性を高める目的意識をしっかりと定めているように受け止められる。

デマンドタクシーなどの公共交通については、市民の足としての利用と観光面と絡めての利用を考えていることについては、今後のとりくみの成果を興味深く探してみたい。



## ② 高野不動産のおしゃれ田舎プロジェクトについて

おしゃれ田舎プロジェクト、若い世代が訪れたい「まちなか」を創出し、田舎で創業・起業を希望する人々を支援することを目的としている。既存の事業主と新規創業者が協力し、地域を盛り上げながら経営を軌道に乗せる仕組みを構築しており、空き店舗を活用した新規店舗の開業支援や、地域全体で商業活動を活性化させる企画が展開されている。また、歴史ある建物をリノベーションし、新旧が交わる魅力的な商店街を形成する動きも進んでおり、移住促進にもつながっている。



日本茶もサイフォンで抽出する「彩本堂」  
古民家を再利用したカフェ



花屋とカフェ「FLORO cafe(フロロカフェ)」  
以前の店「スナックタ子」の看板はあえてそのまま

## 《 所感 》

(山本 みゆき)

「おしゃれ田舎プロジェクト」では元小諸市職員で現在、不動産業を営む高野氏のお話を伺いました。古いものには価値がある、「風情」や「歴史的」、「文化」はすぐ作ることは出来ず、昔から大切にされ、守り伝えてきた背景があるため、非常に重要なことで、観光コンテンツとしても期待ができるが、ただし、それだけで人がいなければ地域が発展することはないというお話に共感します。風情ある建物が利用され、そこから「楽しい」「面白い」「行きたい」などポジティブな言葉が地域の人から発せられるようになれば「イイまち」として認識され、その言葉を耳にした人たちが出かけてくれるようになると話す高野氏の熱量が伝わってきます。実際に小諸市で空き家を利用して開業した店舗は30店を超えて増え続けているそうです。「行政の取組みにはせず、あくまで一人のプレイヤーとして」と熱く話す高野氏のように、民間で動ける人材を大町市も必要としています。高野氏は元市の職員であったことの信頼も高いと感じました。

(大竹 真千子)

以前小諸市役所の職員であった高野不動産の高野社長の、小諸市に対する愛着のたまものだと感心したが、高野不動産としての事業性についてはまだまだ、収支のバランスの不具合が見て取れた。但し、着目点としては面白く、まずは1つの通りに特化して、開業者と空き施設(住居・店舗)とのマッチングをしている点については興味深かった。空き施設の利活用に関するニーズ調査についてはどうしても事業化できない部分であることから、この点においては行政が担って欲しいと感じた。また、参考となる動きとしては、このプロジェクトに関わった人たちが、プロジェクトを通じて交流できる形となっているところは良い取り組みだと思った。

(中村 直人)

情報発信については、御代田町を参考に。地域の新規出店のサイクルもすでに自律的になり、呼んできた事業者がまた新しい事業者を呼ぶ段階になっている。重要なのは、どこかでシス

テムが自律的になっていくことを志向していることだと感じた。新規出店者に対しては、高野さんが融資の相談にもついていき、一緒に事業計画を書くということで、伴走的なサービスが重要だと感じた。街中を案内しながら聞いた話だが、新規出店者にはあえて商店街の地元住民から見てもわかりやすい出店場所をおすすめするそう。地域が変わった、と地元住民が実感できるための取り組み。

(西澤 和保)

近年の近隣地域(軽井沢周辺エリア)の発展も相まって、注目されるエリアとなっているのではないかと考えられるが、小諸市においては、元行政職員がまちづくりのために自らキーマンとなり不動産業を通じて、市が目指すまちづくりの方向性と起業する方への支援を行うことで多角的に取り組みがなされている印象を受けた。

また、開発エリアを定め集中的に取り組むことで、近隣住民や近隣商店へ新規出店を印象付けることができ、注目度や周辺住民の認知度も高まっていることが新たな出店を呼び込むことになっているものと想像される。

両市の取り組みにおいて共通していることは、起業する方との間にキーマンがしっかりと介在し、行政や金融機関、オーナー(家主)側とマッチングさせていることが成果となっているものと思われる。

大町市としての取り組みにおいては、行政の枠にとらわれることなく、柔軟かつ民間事業者と金融機関を連携させるバイタリティーが求められる。

もっと活動的に自由に動く職員が必要と感じた。

## 道の駅・八千穂高原、道の駅 ヘルシーテラス佐久南

### 道の駅・八千穂高原

